

平成27年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の重点目標	1 主体的学習者の育成 2 進路指導の充実 3 積極的な活動の創成 4 広報連携力の発展と国際理解教育の充実 5 定時制教育の充実
-------------------	---	----------	---

年度当初					評価結果		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度へ向けての改善方策
1. 主体的学習者の育成 (企画推進)	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・生徒自身の学びが内発的となり、日々の学習が緊張感と落ち着きの中ですめられている。 ・学校生活が品位ある言動に満ち、生徒は環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・生徒全員が部活動に加入し、部活動が学習との両立の中で、「心技体」を鍛える主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性、同僚性のある指導が出来る。	・多くの生徒が落ち着いた態度で学習に取り組んでいるが、指示がないと学習に取り組めない、受け身の学習になっている生徒が多い。 ・校内では、挨拶など礼儀正しく節度ある行動を取れる生徒が多いが、公共の場でのマナーに幼さの残る生徒がいる。 ・部活動への加入率は96.2%と高く、活動内容や部室の使用状況も改善されてきたが、学習との両立ができていない生徒がいる。 ・分掌にとらわれず、協働の精神を実践しようとする教職員が増えてきた。	・教科を越えた連絡会を持ち、各教科における生徒の内発性を導き出す工夫やノウハウを共有する。 ・利己的な言動の見られる生徒に対しては、毅然とした態度で指導し、保護者と協力しながら集団の一員としての立場を意識させ、自分の言動が周囲に与える影響を深く考えさせる。 ・部活動の時間を保障することに心掛け、開始・終了時刻を守るけじめある部活動を目指す。また、学習不振者に対しては部活顧問、担任、教科担任が互いに連携して指導に当る。 ・学年会・分掌部会・教科会・主任会が報告だけでなく、課題を共有し、様々な立場から意見を出し合い、問題解決、改善の場となるように努める。			
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・昨年度まで研究推進してきた「アクティブラーニング」の考えを発展させ、教職員研修の成果が日々の学習指導を通じて、生徒に還元されている。 ・生徒の学びがテストや大学受験といった実利的目的にとどまらず、真理探究や社会貢献といった高次な目標に向かうものとなっている。さらに、生涯にわたる学びの意義や教科の魅力を理解し、学習が内発的・主体的なものとなっている。	・「アクティブラーニング」の目的や効果を多くの教職員が理解し実践しているが、授業の中での効果的な実践方法については教職員の力量に頼るところが大きい。 ・学びの意義を理解し、主体的に学ぶことができる生徒も増えてきたが、まだ「やらされる学習」「与えられる学習」にとどまっている生徒も多い。 ・教職員の側にも「与えないと学習しない」という意識が依然として残っている。 ・アクティブラーニングを成立させるための、家庭学習や暗記事項と連動した授業づくりを研究中である。	・校内研修や研究授業等を通して「アクティブラーニング」に関する知識や技術を全ての教職員が習得するとともに、65分授業に合う東高独自の授業スタイルについて科内で検討し、モデルとなる方法を策定する。 【校内理論研修①…7月上旬 講師 齊藤萌木氏】 【校内理論研修②…未定】 ・校外理論研修や校外教員との交流を通じて、指導力・実践力の向上を図る。 【県主催研修…年間4回 国語・地歴公民・数学・理科・英語】 【校外教員との交流…地歴公民・数学・理科】 ・より質の高い「アクティブラーニング」を通じて、主体的な学びの楽しさや価値をより多くの生徒に体感させることで、生徒の内発性・主体性を促進し、その後の学習活動につなげていくことができるような授業を実践する。 ・教科間でアクティブラーニングについて連絡会を開催し、本校のあるべきアクティブラーニングのかたちについて検討する。			
2. 進路指導の充実(キャリア形成)	OJTの充実と進路指導力の継承	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。	・「倉吉東高のかたち」における「21世紀をリードする人材の育成」とキャリア形成とのつながりが十分に理解されてはいない。社会貢献という観点を含めた進路設計ができない生徒が一部見られる。	・「倉吉東高校のかたち」の理念の生徒・保護者への浸透を本校の教育活動にあらゆる場面で心がけるとともに、生徒が自分と社会との関わりの中で進路選択に主体的に取り組めるよう指導する。 ・1・2年の進路学習の内容を改善し、大学調べや学部学科調べを、社会貢献という観点を含めて生徒が自らの進路を考える機会としてとらえ、指導の充実を図る。			
	※OJTオン・ザ・ジョブトレーニング	・全教職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・3年生の進路検討会に加え、1・2年生の進路検討会の参加者も増え、教職員の意識は向上した。一方で、生徒の志望は多様化しており、教職員の指導がますます重要となっている。	・各学年の進路検討会において積極的な発言を促すとともに、担任団と分掌の連携により充実させ、学力の分析充実に基づいて生徒一人ひとりが適切な進路志望がもてるよう工夫する。 ・研修等で得た情報の共有を一層進めるとともに、担任が的確な進路指導ができるよう学年間での連携を図る。			
	中堅・難関大学合格者の向上	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数70名以上。 （現役合格者数50名以上） ・難関大学現浪合格者数20名以上。 （現役合格者数15名以上） ・東京大学現浪合格者数5名。 （現役合格者数3名以上）	【国公立大学現役合格者数】 H24年度140名 H25年度120名 H26年度131名 ※H25年度より5クラス 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H24年度52名 H25年度49名 H26年度45名 【難関大学現浪合格者数】 H24年度21名 H25年度25名 H26年度18名 【東京大学現浪合格者数】 H24年度2名 H25年度1名 H26年度1名	・1年次から志望校指導を行い、3学年を通じて適切な進路目標を設定できるよう支援する。 ・学習習慣の確立を意識した初期指導を充実させるとともに、定期考査や模擬試験における学力分析を活かしながら、設定した志望が実現可能となるような学力の育成を目指す。 ・1・2年において、学習習慣の確立及び維持・向上に努め、学力中位層以上の拡充を図る。 ・授業及び3年放課後課外等の内容の充実させ、記述力の育成を図り、学力中位層以上が厚くなるように努める。 ・県外高校との交流や本校独自の講座を通じて目標達成のための意欲を高める。 ・3校合同対策講座や課外などによりチーム化を図り、互いに切磋琢磨できる環境づくりを行うとともに、指導の開始時期を例年よりも早め、超難関校への現役合格を目指す。			

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度へ向けての改善方策
3. 積極的な活動の創成（活動創成）	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自己のリーダーシップを自覚し、より高きを目指す創造的な態度で生活している。 ・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対して当事者意識を持っている。 ・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少ないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。 ・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、その社会に疑いを持ち、よりよくしていこうとする態度が不十分である。 ・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活を消極的に過ごしている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、将来への不安や見通しの悪さから、今現在を充実させきれない生徒がいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発動せざるをえない場面を数多く設定する。また、生徒に適切に指導・助言を行うことで、それらの行事が本来目的としている領域に到達できるよう、創造性を十分に発揮させる。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自己と社会との密接な関わりを意識させる。その際、学年団や他分掌との連携を密にする。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通しさまざまな失敗を経験させ、現実を堂々と受け止められる強さをほぐくむ。また、教育相談を充実させるとともに、生活に消極的になった生徒に自分が出来ることを少しずつ達成させる成功体験を積ませることによって、自信を取り戻させる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自身の手で計画、準備、運営させることにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。また、そこで経験したことや学んだことを言語化する活動を通し、それからの日常生活に生かしていけるような力とする。			
	中高連携力の発展	・中高の連携が進み、効果的・一貫的な英語の指導ができている。	・中学校とのスクラム教育を行い、中高教員の交流と相互の授業研究が進んではいるが、まだ十分であるとはいえない。	・今年度も東中・河北中と英語教育で連携し、本校教員による中学への乗り入れ授業を実施する。 ・長文読解を中心として、家庭学習の充実、読む量・スピードを上げる手法について継続的に研究協議会を持ち、授業改善を図る。 ・相互の授業参観の機会を増やし、相互理解を深め、授業力アップに繋げる。			
4. 広報連携力の発展と国際理解教育の充実（連携発信）	交流活動の推進	・さまざまな国際交流の機会を通じて自国の理解を深めると共に、他国の文化や価値観を理解・尊重し主体的な交流が促進されている。	・中学生英語ブラッシュアップ講座を実施しているが、参加者の満足度が高いにもかかわらず、希望人数が伸び悩んでいる。 ・国際高校生フォーラムや交流事業を行っているが、積極的にホームステイに参加したり、ホストファミリーになりたいという希望が少ない。 ・交流が参加した一部の生徒のみに留まっており、全校的な広がりにっていない	・体験入学の際だけでなく、中学校訪問説明会など機会を捉えてPRしていく。 ・中学生にとって魅力的な講座となるように内容を充実させ、中学校の学校行事等に配慮し、中学生が参加しやすい環境づくりを行う。 ・育友会総会の前の「大人（おせ）の一言」で国際交流をされている方や、ホームステイを受けていただいた保護者の方にお話いただき、異文化と触れる意義や楽しさについての生徒の意識を高める。 ・韓国研修のホームステイの交流を共有する学習の場を設けたり、国際高校生フォーラムでの交流を、多くの生徒が参加できるような内容にするよう工夫する。			
	授業規律の確立と授業改善による学力向上と希望進路の実現	・規律ある学習態度で授業に臨むとともに、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・分かりやすい授業と生徒の実態に合ったきめ細かな指導を行うことで、生徒の学習意欲や学力が向上している。	・多くの生徒が落ち着いた態度で授業に取り組むことができるようになってきている。 ・学校紹介による正規雇用を目指す生徒が増えるとともに、4年制大学や短大など上級学校へ進学する生徒も出てきたが、具体的な進路目標を見出せない生徒もいる。 ・基礎的な学力と学習習慣が身に付いていないため、理解に時間がかかったり、途中で諦めてしまう生徒が多い。	・授業規律の徹底に努め、生徒が落ち着いて学習に取り組める環境の向上を推進する。 ・担任だけでなく、進路担当やキャリアアドバイザーとも連携しながら、一人ひとりに適した進路目標を早期に見つけることができるよう指導を行う。 ・授業改善に努めるとともに、個別指導や面談を通して生徒が学習意欲を維持・向上できるよう指導する。			
5. 定時制教育の充実（定時制）	生徒の主体性の育成	・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことによって、企画・運営など社会で必要とされる力を身につけることができる。	・昨年度から生徒会が主体となって行事を行い、少しずつ企画や運営に携わる生徒が増えてきている。	・生徒会を主体としながら、より多くの生徒が企画や運営に携わることで、連帯感や達成感をもてるような仕掛けを工夫する。			
	積極的な生徒指導	・あらゆる機会を捉えて積極的に生徒との関わりを持ち、生徒の実態を的確に理解し、効果的な指導を行うことができる。 ・家庭や職場と連携し、校外での生徒の様子を把握しながら、協力して生徒を支援することができる。	・情報交換会を毎日もち、面接や日々の会話を通じて得た生徒に関する情報を全教職員で共有し、指導に生かしている。 ・家庭訪問や職場訪問を行い生徒の様子を理解しようと努めている。	・情報交換会を継続し、生徒に関する情報の共有に努めるとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携してよりきめ細かな指導を行う。 ・学校から家庭への連絡や情報発信を継続するとともに、保護者会などを通して信頼関係を構築し、家庭から学校へ連絡や相談をしやすい体制を維持する。			

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60％～80％の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40％～60％の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40％未満である。